

災害情報のあり方

令和5年台風2号で、杉並区は崖崩れの恐れのある105世帯(200人)に避難指示を発令したが、実際に近くの避難所へ避難した人はひとりもいなかった。杉並区は避難指示を発令したのは今回が初めてのことだったとはいえ、避難者がゼロだったという結果は重い。そこで6月3日午前2時15分に杉並区が発令した避難指示を例に、情報共有と避難行動について考えてみよう。

ひとりも避難しなかったことに関して、二つの可能性がある。一つは避難指示が住民に伝わらなかった可能性。もう一つは伝わったが避難行動に結びつかなかった可能性だ。

杉並区に警戒レベル4の土砂災害警戒情報とその後避難指示が発令されたことを私が知ったのは、自宅と契約しているジェイコム緊急地震速報が3日深夜の午前1時50分に鳴り響いたからである。ジェイコムは地震以外の災害情報も通知される仕組みになっており、私はオプション(月額528円)で契約している。

ドコモの緊急地震速報は鳴らなかったのに、もしジェイコムが鳴らなかったら、私は避難指示を知らなかった。105世帯のうちこのオプション契約をしている世帯は皆無の可能性はある。深夜で多くは寝ている時間だから、テレビやラジオが発令を知った世帯も皆無かもしれない。避難指示を知らなければ、避難しないだろう。

そこで杉並区に「105世帯にどのように、警戒レベル4の避難指示が発令されたことを知らせたのか」と尋ねた。ちなみに警戒レベル5の大雨特別警戒は既に災害が発生している状況であり、今回の警戒レベル4の避難指示は、それに次ぐ危険な場所から全員避難を求める極めて強いものである。

区民のいのちを守るのが区の仕事なのだから、避難指示を知らせる最大限の努力をすることも、全員避難完了まで確認してほしい。

○崖崩れの恐れがあるのは、限定された105世帯なので、事前に危険性が高い土地であることを全世帯に徹底的に周知してほしい。合わせて事前に全世帯の家電話、携帯電話、ライン、携帯メールアドレス、PCメールアドレスを登録してもらって、緊急時には最大限の努力で知らせてほしい。ジェイコムの緊急地震速報をこの105世帯に導入するのにも有益だろう。

○広報車は有効だと思うが、家の中では雨で聞こえないかもしれない。そこで発令後、各世帯のインターホンに知らせたい。

（実際には、広報車が現地に到着した頃には雨は弱まり、崖崩れの恐れもないと判断したため、現場で待機することにどめてアナウンスはしなかったとのことであった）

私は区に以下の提言をした。

○区民のいのちを守るのが区の仕事なのだから、避難指示を知らせる最大限の努力をすることも、全員避難完了まで確認してほしい。

令和5年台風2号で考える

東京都議会議員・令和防災研究所理事 早坂 義弘

ホンを鳴らして回って、全世帯に知らせたい。

○要は住民が情報にアクセスするのを待つのではなく、区からおせっかいなくらいに知らせるべきだ。

○豪雨の中の避難をためらう災害弱者がいるかもしれないから、区はマイクロバスを出して、それに乗せる努力をしてほしい。

最初に述べた避難指示が発令は住民に伝わったけれど避難行動に結びつかなかった可能性に関しては、私には検証の術がない。ぜひ区には105世帯を対象に、避難指示発令をいつ知ったか、そしてなぜ避難しなかったのかについて調査してほしいと思う。もちろん避難所には誰も避難しなかったが、そこは別の場所避難した人がいた可能性や、その日は帰宅しなかった可能性もある。

区の事は避難指示を発令して終わりではない。それが住民に届き、実際の避難が完了して、初めて終わりになるのだ。

調節池の正しい情報

この台風2号では、善福寺川と神田川から取水する環状七号線地下調節池が機能したが、情報共有に問題があった。ごく簡単に河川整備と調節池について説明した後、私の問題意識を述べたい。

大雨が降ると増水して河川があふれることがある。河川をあふれなくするためには河川を横に広げるか、縦に深く掘るか、排水量を増やすことが必要だ。しかしある地点の排水量を増やしても、その下流部が狭いままだと、そこがあふれてしまつので、河川整備は海の側からこつこつと時間をかけて行う必要がある。都内の中小河川のすぐ脇には住宅が立ち並んでいるので、河川を広げるにも掘るにも、実際には膨大な時間を要する。それではいつまで経っても上流部の河川整備ができない。

それを補うのが調節池だ。増水した河川の水をあまる地点(調節池)で吸収できれば、そこから下流部に流れては水量が減るので河川があふれることはなくなる。そのことは同時に、その横に広げるか、縦に深く掘るか、その両方の河川整備を行うことを可能にする。そうした考えの下で建てられたのが環状七号線地下調節池だ。25ヘクタールで1800杯分に相当する容量54万トンのおかげで、この調節池が稼働して以降、下流部の河川があふれることは激減し、かつ上流部の河川整備も始まった。1030億円の仕事費は決して高いものではなかったろう。

この調節池には善福寺川と神田川に面したゲートがあり、調節池から下流部の河川があふれそうになるギリギリのタイミングでゲートを開き、取水を開始する。河川が増水するたびに「もつと早くゲートを開いたら」という意見を聞くことがあるが、容量に限りがあるので、ギリギリまで我慢すべきものだ。

さて、こうした大きな効果をもらっている環状七号線地下調節池ゆえに、住民の関心は高い。だが、都建設局がゲートを開放した事実の公表を行うのは大雨が収まった後だ。私はいかにして、ゲート開放時点で、直ちに公表すべきだと建設局に提言しているが、局は私の提言に全く耳を貸さないうえに、なぜゲート開放の事実を公表しないのか、局の回答はこうだ。すなわち、水量が減るのは調節池警戒を」と丁寧呼びかけるべきなのだ。

今回も、調節池より上流部にお住まいの方で「ゲートを開いたら、上流部の水位も下がった」とおっしゃる方がいた。それは雨が弱まったからであり、ゲートを開いた効果ではない。そうした正しい情報を局は繰り返し説明すべきなのだ。不確かな情報をSNSに流れる前に、局が丁寧な公式情報を発出してこそ、住民の安全は守られる。そして、そうした正しい情報が共有されれば、例えば消防団や地元町会自治会の警戒活動は、上流部に集中することもなくなる。

◇ 杉並区も都建設局も治水対策に努力を重ねている。そのことに感謝しつつ、最も大切な住民の避難行動や正しい情報理解に向けて、更なるご尽力をお願いしたい。